



18
204
14

年月日
蔵書

北郵抄

寒燈夜話 小栗外傳卷之十二

東都 絳山戲編

第二十編

山鬼の魔術女児を騙と
老僧の念珠怪獸を走と

東學

且説菟坂の常阿上人は小栗夫婦を熊野山に赴けしめ、夫より小栗の所業を
の東國にありし居る輩に助重の光景を告ぐると武蔵ある二芳村の
里にありしちりて下総の方にて候と往く結城の里に至りし此辺に
栗の所業を語りしに、暫く此地を逗留し、人々の行状
搜索く此地方に結城持朝の居城ありて山川の便あり、珠の持朝の政
正にありし民豊に、娘ひね爾と、一事件の奇縁あり、そのいふゆゑに
困守あり、持朝一人の女兒あり、其名を白糸姫とて呼び、今年十七

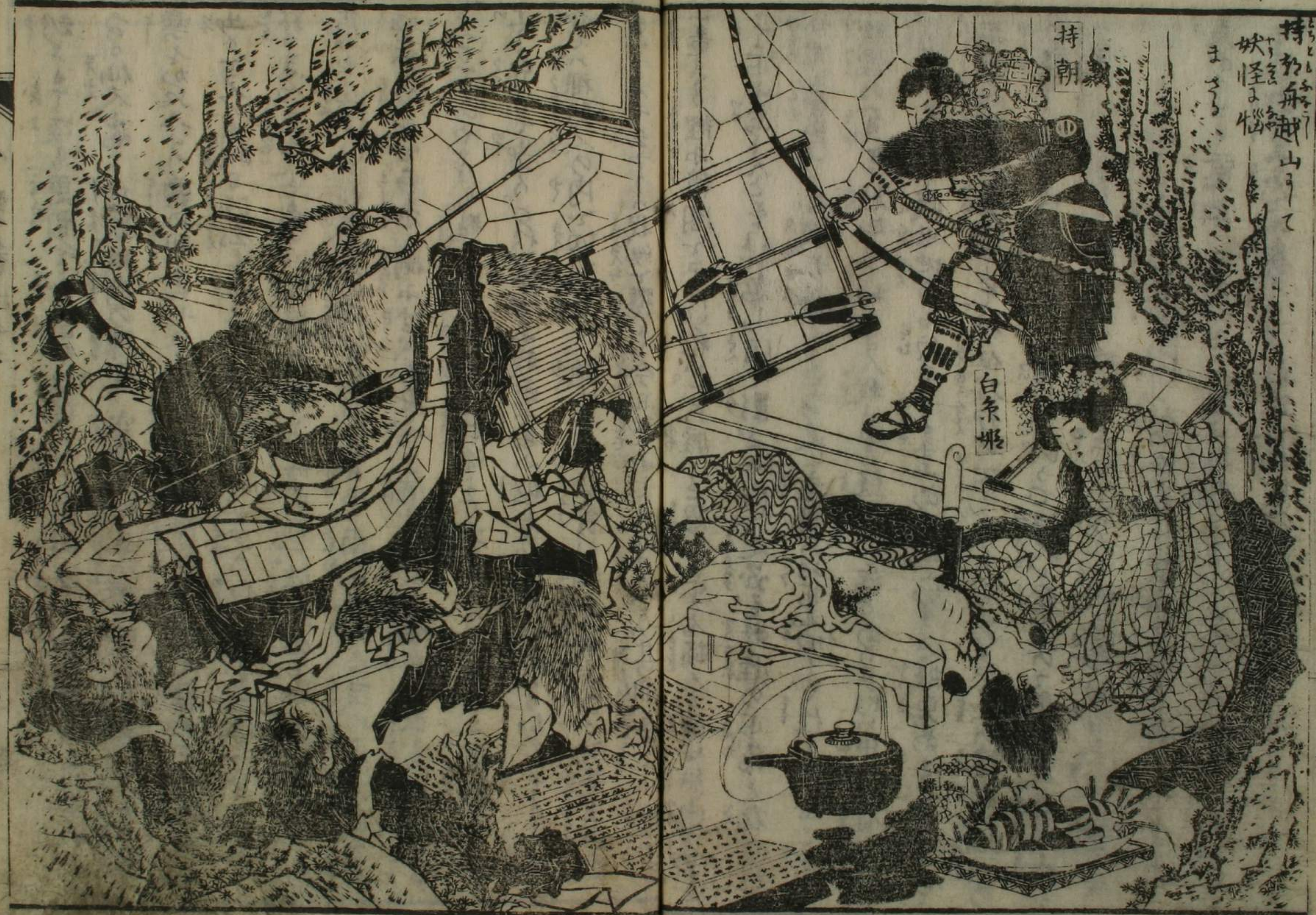
容貌比なく。いと艶麗なり。父母のしつとみあはるる所。此の才貌支全の者
 なる。さう。娶とははじと深圍。中をひく。人の中も見入らせり。秋
 の下旬。一夕。風雨晦冥中にて。驛にかりし。忽ち白糸姫の去向を知らず
 形りぬ。杉胡夫婦もどつれ嘆き。人と四方を分ちて。搜索あれども。知らざること
 なる。あまりの索かひく。一。並の博士を。詰く。卜らるる。あは。若く。と。これ
 人間の。つ。さ。ら。ら。ど。妖魔の。所。なり。此。より。戌亥の方にて。も。姫。人。を。ま。し
 する。ら。ら。め。し。ま。ご。命。恙。は。し。ら。り。人。も。九。日。も。過。う。が。ん。朱。は。速。く。搜。索
 する。と。ほ。く。せ。が。悔。も。甲。斐。さ。い。ど。り。と。ど。ぞ。杉。胡。と。は。て。易。う。な。る。ふ
 ち。ひ。我。若。も。一。城。の。主。と。して。總。倉。殿。の。外。藩。と。して。今。妖。魔。の。為。る。女。見。ん
 奪。取。る。と。其。武。威。拙。く。平。士。も。劣。る。斯。て。い。う。て。軍。を。将。の。任。ま。る。人
 昔。は。我。家。の。鳴。弦。を。と。て。不。怪。異。を。退。治。し。三。位。頼。政。の。闇。夜。上。越。と。有。り
 君。の。心。悩。を。易。ん。じ。ま。せ。り。我。武。彼。交。も。及。ら。ぬ。と。も。汝。困。は。る。女。見。と。奪。取。を
 む。と。あ。め。く。と。徒。お。る。ん。や。奈何。の。大。魔。あ。て。も。め。れ。此。能。か。報。つ。せ。め。れ。る。と
 それ。より。士卒。を。引。俱。一。城。より。乾。方。に。日。く。搜索。せ。し。も。それ。と。定。る。舟。舟。と。さ。ん
 朝。より。夕。母。至。り。山谷。の。厭。な。く。奔。ま。る。る。心。り。あ。て。徒。日。次。過。り。ま。り。さ。り。ふ
 下。世。国。山。右。舟。山。と。り。隣。國。さ。ら。結。城。と。程。も。近。く。猶。杉。胡。の。領。ま。り。す
 此。地方。の。結。城。の。乾。方。當。り。し。う。杉。胡。彼。所。を。尋。ね。や。と。健。中。り。なる。即。堂。と。撰
 數。十。人。と。將。く。彼。山。に。上。り。終。日。尋。ね。求。れ。と。白。糸。姫。の。去。向。を。知。こ。は。し。其
 日。も。既。く。暮。ん。と。し。金。烏。西。方。傾。け。夕。霧。山。隈。中。膝。腫。と。な。り。雷。と。は。り。女
 對。ひ。の。峯。の。樓。閣。の。彷彿。と。して。入。り。な。れ。持。朝。と。は。望。ま。し。と。不。意。に。今。日
 終。日。此。山。を。待。た。し。し。ほ。れ。と。も。一。軒。の。白。屋。が。も。が。ん。目。今。此。樓。閣。を。入。る。と。怪。し
 々。れ。ぬ。ま。れ。往。て。入。る。と。谷。を。下。り。崖。と。攀。ぐ。樓。閣。の。在。し。処。を。至。り。な。る。心。も

（Marginal notes in smaller characters on the left side of the page.)

消く痕も形。すの妖怪も欺られぬと噴るといども詮さへし猶日既
 暮て士卒も疲勞なれば斯て物の用も乏かじ今夜の士卒も
 明且に至るが尚人數を倍して此山中と特けし妖魔を獲て今日の這眼
 暗さんと麓の方へ赴くも忽然として一人の僧も出遭さる。中か持胡が馬前
 進くと頓首して中か持胡も貧道を彼正なる谷間も居る老僧が徒然
 とりね只今師の中である。今日相とこの山中も持胡も日暮るに
 速中行く庵も進んて中か持胡も命も付らぬ世も中か持胡も持胡
 不審ていふ汝が師の何手の人ぞ我悩めを知く進んて中か持胡も
 げらふも中か持胡も世も中か持胡も師の名も申陽と中か持胡も
 たゞ中か持胡も嫌此山中も菴も常人間も交る中か持胡も只公道三昧も光陰も
 送れり。爾るものも中か持胡も自ら中か持胡も霊はして草庵の裡も在るが中か持胡も
 外のことほでも知りぬ相公の此山も中か持胡も昨夜既も知りぬ。今も中か持胡も
 多しを知る。かゞりりの浮屠氏も中か持胡も國守の正恩も中か持胡も
 るまよりのも道も命も中か持胡も進んて中か持胡も露疑ひも中か持胡も師も意も果は
 と懸中か持胡もへるも中か持胡もお初懸ひも中か持胡も塵世の俗も厭ひもこの山中も陰れ
 行通彼もみだれ儂も中か持胡も雨もわれも俗も怪も中か持胡も我も款待も芳志もは
 かり。も中か持胡も空も中か持胡も形も中か持胡もきも中か持胡も案内も中か持胡も中か持胡も
 二町も中か持胡も中か持胡も忽ち一坐の大松の下も中か持胡も其例も柴門のり。薜蘿も
 纏りぬと甚も雅も中か持胡も木魚の聲も谷神も御音も中か持胡も寂寥も中か持胡も
 持胡も門外も中か持胡も中か持胡もこれ前も中か持胡も入りも中か持胡も程も中か持胡も木魚の聲も中か持胡も
 志も老僧の身も中か持胡も中か持胡も法衣も中か持胡も穿ひも中か持胡も水晶の念珠も中か持胡も摘りも門外
 中か持胡も中か持胡も貧道も中か持胡も則ち菴も中か持胡も申陽も中か持胡も中か持胡も此山中も中か持胡も
 既も中か持胡も中か持胡も

及び頗るの恩を宣する事也。適相公今日此山を狩りし日、宿せ
 る方好く、さと悦ましくおぼさうと存じ、あく徒をてて草庵に上
 りて、自ら迎へて、さうな老翁の歩行自在さうさういふこ
 此無れを、故し多し此山、一夜を以て明し、あれと懸く、さうな
 徒ありげあるが、忠申す、さうな喜び、老師の宜へばごとく、日暮不知
 案内、山中、殆ど、及び、小芳志、よる、今夜を易く明さんといふ
 出、主従を、数行、持、胡、これ、謝し、其、菴、主、對ひ、さうな、某、今日、此
 山、お、た、鳥、獸、を、獲、入、る、う、に、我、一、人、の、女、兒、の、あ、い、し、此、と、妖、怪、の
 ま、心、を、示、し、て、此、の、手、が、た、も、は、い、ま、空、く、山、を、下、ら、ん、と、を、た、た、霧、を、

菴、に、り、裡、の、樓、閣、を、見、は、れ、た、こ、の、怪、し、と、思、ひ、ま、を、見、極、ん、と、溪、を、越、山、を、攀、り、
 せ、亦、お、至、ん、と、と、ね、の、忽、ち、消、て、影、も、は、い、是、必、と、妖、怪、の、正、為、と、存、せ、れ、た、
 女、兒、を、存、志、ひ、も、彼、怪、物、の、こ、さ、う、と、し、老師、の、此、山、を、一、く、住、ま、う、か、し、す、け、の、
 妖、怪、の、有、言、社、那、り、て、お、ま、入、我、と、め、説、き、し、福、と、あ、り、た、れ、申、陽、眉、を、破、め、
 前、め、り、て、我、此、地、方、お、行、て、十、年、お、あ、ま、れ、し、ま、ご、妖、鬼、あ、る、と、妖、鬼、を、
 示、す、此、地、方、の、靈、地、也、と、神、仙、控、記、の、下、に、今日、入、を、た、る、示、の、樓、閣、は、仙、人、の、
 控、戲、也、と、い、ふ、仙、の、素、人、と、害、せ、し、う、で、姫、人、を、棄、め、の、り、あ、る、事、今、我、の、
 此、菴、に、仙、の、命、を、奉、め、れ、姫、人、の、去、向、を、問、ん、相、公、忍、び、居、る、仙、の、言、を、
 答、め、せ、ぬ、と、其、正、を、知、り、之、仙、の、命、を、奉、め、少、の、奇、怪、と、ん、ま、い、し、
 雨、の、り、こ、も、露、駭、じ、ま、い、そ、と、い、お、持、朝、さ、う、り、や、と、い、ひ、一、く、其、言、を、
 承、り、し、訂、堂、亦、と、い、真、事、の、り、た、く、忍、び、し、是、持、胡、の、三、次、の、間、に、居、り、け、を、



持朝

持朝舟越山可て
妖怪の悩
まざる

白糸姫

川原巻六十二

17

かく夜も更闇て三更やなほと思ひ外方人のすわりのひきつる
 仙人也と持綱紙門の隙より窺へん徒才も燭を照して出立先一挺の
 雲をかた入る。雲の圍少七八人の英貌女性陪徒なり。中て雲の戸を圍ひて立
 出ると入るふ此日以公を尋て捜索する。我女兒の白糸なまはすあつてさ
 狂るきら。立歩んとささけり。前々庵主の戒めれ浮動をわづめ尚しと
 窺ひし。怪しむ庵主の傍をくだめ徒才も容容貌みる。後の了し。寸菴主
 法衣を脱して白糸が側ゆけをちめて。やよ酒りて良有はす。今夜の良有は
 さつてとらわたりも。瓶子盃持て歩る其跡より大きあたる。組板は裸躬なる人
 上へ昇りて出る。これとるふ。我郎當も似たり。こまほびとる。おしし酒
 香ての裸躬人の肉を切て肴に飽みて。飲食ひ酒奪う。十分する。寸菴主白糸が
 命をとりて云々の我汝を獲り今日既ふ七日に及べり。其間多々小説ぬる

まれと我も憂せ。今夜の是非。枕席をとめて。また若固辭とあつて。汝と
 りて組板の入ともあつて。せん且汝が父持綱も我神通せりて。此正母は
 これをさへ命とらんごうふ。とて。命を睡や否と追々持小婢戯んを
 白糸双手にたりて。かしの拂ひ涙をらうくと流して。いぬ奴家と世の作業悪く
 多く。妖獸の爲も獲り。れ此地もすや。さやも甚を念ふ。あり。か。此
 汝と枕席を共よする。おや此身甲斐さな女も。汝も命をさうらん。れ
 父の名もあふ。下総の結城の地。れ。主なる。弓矢の道のいと賢く。口をせぬ
 何条汝が力りて傾けり。このめん妖術をりて。父上を。此正母は。ほきかせ
 奴家を欺く。虚言をらん。いづれ心をそとせも。妖魔のたぬ。お。汝。活まんや
 殺さうと。速も殺さる。と言。智く。罵りけり。庵主大に怒り。我壽五百歳中
 及び神通既も成く。公の欲する。死なう。と。いふ。今汝一女子。つる。意

意せさうぞ奇煙心。そこのやみよ。今よ悲しれ憂目とんげ。其石汝を殺さば。
 と俄に尤右不令。白糸が衣裳を脱しも。前の俎板に御も。強く汝煙せんや
 ると。持朝最前より。光景紙門の隙より窺ひ居り。事毎に。忍び
 ざれど。女兒が。お過失の。ことを。怖怒り。おあそく。わひし。事既。よ。お
 至れ。今。堪。う。紙斬。て。入。ん。と。ぞ。紙門。堅く。固く。開。く。り。な。し。こ。の。惜
 と。刀。杖。切。れ。られ。と。只。足。洗。石。と。ん。と。敷。き。て。些。も。破。ま。と。そ。付。女。兒
 の。叫。ぶ。声。頻。よ。ま。こ。ゆ。ま。心。を。焦。燥。危。角。と。る。小。紙門。の間。は。前。を。貫。く。と
 なる。隙。の。隙。の。隙。の。よ。り。詛。き。弓。矢。を。ぞ。菴。主。と。祈。ひ。し。事。う。と。射。る。菴。主
 此。射。酒。を。飲。で。居。り。し。目。今。前。の。射。ま。る。と。ん。り。も。不。孟。と。り。く。や。葉。を
 拂。ひ。持。朝。の。方。と。白。眼。く。嘲笑。く。し。の。た。れた。汝。武。藏。も。誇。り。我。を。射。留。入
 と。さ。ん。ぞ。お。し。れ。その。膽。の。太。中。なる。と。今夜。の。下。物。を。せん。と。ん。ふ。と。亦。射。く
 ると。罵。り。つ。這。裡。に。射。ひ。飛。ま。る。と。持。朝。は。う。と。獲。矢。を。り。て。は。つ。め。結
 矢。終。早。射。り。と。し。く。も。或。り。も。さ。り。わ。か。ら。ん。ま。さ。は。ま。は。く。蹴。落。し。な。う。ど。
 花。を。よ。り。も。尚。早。く。人。が。と。り。て。敵。が。く。は。も。武。勇。の。父。へ。射。持。朝。も
 為。さ。き。や。う。射。は。矢。終。も。そ。れ。れ。れ。と。り。に。せ。ん。と。声。を。揚。げ。士。卒。も。お
 回。急。り。の。は。ら。お。お。ひ。嘆。息。し。嗚。呼。云。甲。斐。も。な。れ。下。郎。も。此。う。我
 一人。此。妖。煙。を。仕。留。んと。自ら。公。と。勅。す。の。南。無。や。八。悔。大。菩薩。其。武。運。も
 ぞ。ぞ。神。姿。不。思。議。の。眞。助。と。れ。此。妖。魔。と。亡。ら。し。め。女。兒。白。糸。を。助。け
 多。くと。一。念。に。双。手。を。り。て。紙門。を。押。さ。し。神。羽。の。加。護。も。や。や。も。入。紙。門。に
 均。紙。門。を。ら。く。と。崩。れ。と。倒。し。う。ら。あ。る。味。も。射。朝。と。太。刀。杖。か。た。し
 庵。主。と。目。が。け。只。一。太。刀。と。斬。は。く。と。あり。の。菴。子。と。志。向。へ。投。射。ま。る。と。ぞ
 か。た。し。これ。を。避。き。と。菴。子。の。酒。け。を。敷。て。面。お。さ。ぬ。と。か。く。は。し。が。その。葉。葉

湯あつた物か。はしりの杉柄着て寝た。たたくとして目くらめき。髪付は後
 を失ひし。うら仕持にね。惜と。氣を勵ま。て目次用。今十てのり。妖鬼
 も形。庵も女兒も消失。て。岩石累々。て。洞穴。て。夜のほのく。と。明。け。て
 杉柄奇異の思ひ。とも。ま。て。妖魔。騙され。杉。取。を。は。つ。つ。つ。中
 鳴るとい。と。詮方。杉。即。堂。ホ。と。い。う。小。と。其。を。と。捜。索。す。に。洞。穴。の。外。か。は。山。岩
 間。も。夏。蔓。より。延。び。居。り。ぬ。中。ま。の。即。堂。を。見。え。ど。あ。の。何。方。か。と。し。て
 四方。と。顧。み。ゆ。る。処。に。五。骸。断。ち。あ。つ。て。死。つ。つ。つ。の。あり。杉。柄。魁。こ。ろ。あ。り。此
 即。堂。の。昨夜。組。坂。お。上。ら。れ。は。つ。つ。つ。の。と。措。き。て。念。念。汚。傍。ま。り。郷。ら。れ。し
 即。堂。ホ。と。解。放。ひ。昨夜。の。光。景。と。物。語。を。不。即。堂。ホ。と。涙。を。流。し。て。い。ふ。殿。様。か。つ。く
 お。じ。は。し。つ。と。ま。が。り。我。こ。の。昨夜。徒。牙。ホ。と。の。一。室。を。使。ひ。酒。火。効。あ。ら。し。し。が
 不。思。議。や。その。酒。を。飲。と。均。く。渾。身。糜。働。く。の。時。ど。か。い。と。い。ふ。こ。れ。も。声。知。ぞ。

兎角。さ。う。うち。三。四。人。様。を。似。さ。る。傍。入。ま。て。却。の。ま。り。郷。女。何。某。と。奉。ま。ち。り。ぬ
 其。後。殿。の。声。と。呼。ぶ。声。の。交。へ。れ。と。声。生。ま。れ。か。回。應。り。さ。ら。今。曉。も。及。び。衝。し
 酒。の。醒。醒。を。れ。が。斯。言。語。と。ら。な。せ。と。も。又。辨。高。年。生。の。こ。と。も。な。ら。し。と。い。ふ。ま。

杉。柄。の。身。を。見。て。毎。念。ま。つ。と。い。ふ。と。も。妖。鬼。が。不。行。の。ま。り。が。一。先。遣。い。還
 人。數。を。傳。へ。再。び。ま。り。て。女。兒。と。取。戻。し。此。位。を。報。め。と。夫。より。士。卒。と。し。俱。將。

降。ん。じ。て。馬。と。捜。索。す。洞。穴。より。三。丁。づ。の。下。に。其。を。鞍。の。ま。り。て。馬。を。ん。と。

こ。の。ま。り。人。を。棄。れ。ぬ。恨。骨。髄。に。徹。し。齒。切。を。は。て。山。を。り。り。城。中。に。還。り。累。世。の
 老。當。宗。を。集。り。山。中。の。光。景。を。物。語。妖。鬼。と。討。て。術。を。識。る。術。を。對。一人。の。老。當。宗
 を。み。せ。り。さ。の。り。り。今。東。國。の。ま。り。殿。の。弓。矢。を。傍。人。の。り。り。も。是。を。爾。お
 彼。山。中。に。居。る。妖。鬼。賊。を。騙。し。ち。し。と。何。と。大。い。殿。を。り。斯。の。に。い。て。化。へ
 の。か。り。て。罰。を。り。り。結。り。り。昔。より。妖。鬼。を。討。め。り。神。力。を。助。め。り。り。その。功

成^{なり}が^{これ}に^いて^かよ^りて^小臣^思ひ^けく^この^近世^東國^とも^いひ^まる^生菩薩^と人^乃
 そ^のの^み敬^まへ^相持^國友^にか^る托^行上^人の^さの^を近^比此^城下^小栗^とて
 旅^宿り^し近^世の^民を^海渡^せり^其舟^をな^くふ^沈病^ハさ^らな^らず^妖生^示し^惱ま
 さ^るの^の一^回上^人の^加待^を禀^せる^故再^生災^害を^除く^と牧^奉さ^るる^皇は^殿
 上^人を^頼ま^り姫^人の^心を^悪く^還す^まさん^と疑^ひは^日速^よ上^人を
 城^中へ^托き^めれ^しと^夜上^まら^托朝^誓時^考と^もじ^さが^海あ^つて^宜ふ
 あ^の汝^が妹^実不^爾の^上人^のこ^我も^知る^の明^日に^托ま^せも^は今^こも
 上^人の^旅宿^に往^懇と^頼ま^んさ^るが^汝案^内と^にに^俄中^佐人^を信^じ徑^に托^行
 上^人に^旅宿^再赴^きたり^茲に^汝河^上人^に去^比より^結陣^小栗^り小^栗
 助^重郎^堂の^去回^を捜^索す^が池^庄司^後友^舟の^もか^連つ^て其^他の^人も
 還^舎を^庄司^木の^三人^の主^君の^難病^をな^げて^迅走^せる^が今^保せ^んと^相議^すて^上人

小^別は^汝告^げん^と此^知よ^する^途を^して^見る^加後^片圖^の兄^舟小^出合^して
 主^人の^身れ^上を^結り^しと^れも^俱小^栗阿^上人^の旅^宿よ^すり^本を^識ん^と
 せ^しふ^土民^ホ十^念秘^符を^乞ふ^と陸^續と^て上^人の^旅宿^小群^集いと^喧く
 せ^し本^舟及^びそ^の系^指の^人れ^去比^行居^り日^も中^西傾^く以^津や^く人^も
 教^へんと^さる^付従^者多^く俱^しつ^れの^旅宿^よす^り案^内に^く常^阿上^人小
 栗^をと^らふ^徒舟^ホと^も告^げし^上人^とれ^くい^ひま^はし^まる^が人^も入^らん
 面^様も^似く^身の^道服^ハ穿^てその^まま^よう^の武^士の^入道^志は^るう^と先
 づ^り上^人の^身方^{より}そ^とわ^れれ^彼の^心を^なぐ^て云^某ハ^下野^園定^舟山^は修^ら
 り^の今^日此^所よ^する^こハ^上人^の意^悲と^顔か^がみ^{なり}そ^の奈^何と^なれ^ば
 今^夜此^地の^願主^結陣^托朝^上人^を見^える^岩舟^山は^托せ^んこ^とハ^同ん
 ぞ^し其^所上^人舟^を止^めて^彼を^助け^まし^も上^人舟^ハ出^し修^ら我^眷属

悉く亡びぬ。此の耻は自ら生く世々上人の鴻恩を亡くすべしと
 笑へる上人を笑て不審撫子と指眼を因く。此付記念して居る
 なるが忽ち双眼次ひたれとこと白眼大喝一声して曰汝畜生邪念と擅し
 人を欺くこと何ぞ其まき足まで犯せし罪と悔志氣をあらためて各
 助けの佛神を乞ふをせしめて犯罪を宥へよとふもあへん。今此の事
 我を欺れ國守に仇せんといふこれ尚ほ罪を擧げあふとや。そく其志氣を
 改めよ爾らと我汝をて永劫奈落に沈まると。奈何畜生よ何や
 と責ぐけく罵る頭を揚ぐ嘲笑ひ膝を屈し腰次臑めて恥ぢる我
 逸楽をせんがめく何ぞを改めて木石のまじり世に生ん我も術あり候
 さうしに坊も思ひ知しやさんと立揚らんとする処を捨てる念殊とあり
 上へ畜生の妖術除陀の正法を奈何と。とこと拍ひつゝ。由ありけ成

入道の才一縮となるうと思ふ猛ら羊狂一猴と変へ一声を叫ぐ
 逃去れ其徒若み好猿身変へ獅子なんとを散らめ。何方も形く
 逃去り。上人の徒をこれをもく愕然として驚えは。上人は對ひ彼を
 是何等の妖物也と何の害をなすと。と不審問へ怪しき道理
 かり彼を攫といふ獸もく猿五百歳を狩るとれば攫まなれり。色
 蒼々として社人のまじり行善人を攫おま。若くは恥故とて攫と謂へ。と
 純社中て北ね。故ふまに攫父と名づけり。され人の婦女を攫てこれと
 嬢。子を生むといふ。近は此地の傾き結城打朝の息女妖魔を攫れ
 せ去向をまきとて。今この老攫の杵をひらる。持朝の世は。勇
 好の女児のまじり山猫せ。妖獸を惱まされ此の事法次乞ことあへん
 攫を争とれを知り逃れざるを。我を驚かす。人を惱は。世に



害あるま田生いして助ることをせん持胡其のまら法を教へく彼畜牛を除
 ちひへと説示し多の徒身ホとめて其妖悪の獸する妖知の師の道徳を
 感銘せり斯る所は旅宿の門外開く國守の出入りと保正ホを初奔を
 常阿上人も徒身ホを俱して門外より出づ行持胡上人をこれと做せじ
 常阿上人も慌忙これを回し相公ゆきの故のて貧道は旅宿へいせ
 めふ事ゆふは鶴人とそ居るまきまゆとやといゆれは道徳の聖を指さす
 ことと畏し頼まふ事れ侍りし裡同伴や多とわれはまきまゆと居入れ
 中、賓主の坐定りて后持胡よりくる上人此地方へ杖と曳りてくる
 必り侍りて塵俗の勢を隔られ相見ると一日とてとてうら近
 最愛めての女兒を妖怪のつめを奪いとてわが此下彼下と索るは違なく
 そのゆへにまきまゆを懐くれ今日に旅宿をまきまゆのりことと偏度とも票なく且ま
 女兒を奪ひて妖鬼と降伏し女兒を再會せんこと頼まふせんか
 述べれは常阿上人より持胡命いして辞やまん姫人と奪ふる鬼今日既かまの
 旅宿まきまゆの相公の多道か力と借んと志りて妨人と彼畜牛はが咄言
 擅中人民を悩まゆりて樂とて如邪の妖獸攘りて去り去き彼を五百歳を
 経し猿もく獲とりて粗神通を得はれども佛力を借らぬいして討さるゆの
 欠き相公彼悪獸と退治し多の姫君と救ひ多のみあふん并く人民
 救ふゆ彼が悪行民の嘆き少くも相公の國守に在りて民の害を除
 けり其任に貧乏まきまゆ衆生と濟すも勤るの謹む國守の力をたすけ
 ちひへん疑ひ多のて貧道言語を用ひ多とまきまゆ持胡慈悲して
 貌を改め我がこと速は願望のて感謝とて中修めり上人の教い
 疑ひちひへんまきまゆ女兒を奪ひて妖怪その神通をうらむとと
 思ふ山まきまゆ

西入卷之十二

十二

辨らうとて詳小説話と云。上人さぞひきりて明日彼を討多うとならぬ心
 剛力強きりの十人づりを俱。相公と女性の姿を扮打りてこの相公の
 了を獲。知らしめばたぬ。さて彼かりとある集ひる婦人多くはく人ま
 達と子細を問ふ爾れ彼着属少き術めぬ。刃と変じて女とをせ
 るもそと人其所此鏡を照さば。いづる術をうととも。淺うつる旭敷くこと
 かうまは。既中て危急のりもあふ。此秘符を投。多人身非自在なるに。
 容易退治。もう入る疑ひは。貧道又此下居て新念をば。相公の力次
 かけをもせん。と二面の宝鏡と。数十符をよひま。お初うく。たひあけ
 淵とれば。上人再びさうりた。岩舟山へさうり。近くと。たれば。相公の
 ころちの人と。彼妖獸とよく知りて。いん彼少。あても。此謀と。知らば。平次
 做好さるのみ。中へ書紙引出さん。これを。奈何は。いふ。あつ。お初うた
 我此の心は。さうり。宣うと。彼。僕子。あて。あつ。あ。定。我。即。意。を
 知りて。と。と。人。と。更。あ。ま。と。足。あ。を。悩。し。り。

第九編

九傑 遠慮良將と助く
 三囊 奇計妖櫻を伏と

且説。府屏風の後より。二人の漢子。踊出。お初の前。お首。て。お。我。は
 俱。多。れ。と。お。持。お。ひ。て。これ。を。え。る。小。其。骨。相。た。ら。ん。は。何。れ。も。高。原。傑。の
 士。と。て。た。ね。の。子。細。を。問。ふ。と。お。上。人。二。人。を。吃。し。ふ。と。お。在。ま。を。誰。と。う
 思。ふ。當。國。の。お。持。お。あ。て。お。と。あ。る。と。斯。の。を。れ。を。さ。そ。と。云。懲。せ。ら。二。之
 の。漢。子。平。伏。と。い。ふ。小。臣。あ。る。守。守。に。由。緒。の。り。の。あ。て。め。ん。が。這。回。の。は。供。お。し
 望。ま。と。と。い。ふ。お。持。お。我。汝。亦。を。知。し。て。い。う。お。の。も。さ。ん。お。父。を。後。養
 小。み。と。て。各。武。謀。代。の。は。あ。て。を。る。縁。故。め。く。我。の。助。重。の。は。と。承。兄。と。後。取

兵助女もと云々と大八郎高次と申結城名武原一家の親とて
 由緒ゆとりは上より。今彼亦て承且つ妖鬼退治の仕儀も惱め
 刃をひきつゝ望まふにじり我々俱し多うは家承くも
 幸ひ此仕儀を仕果てん其好意をりて主君助重の身は
 頼もせんとせん云は常阿上人を頼みて上人も
 思ひこめて速くも上人も其志を憐れ給へども
 僕二人むらほはる。這回のは供を承けんと。言は
 知れぬ。我朋輩既九人す。此亦も集會り。尚
 是承くおぼえ。とらん。大は比羽羽ら
 二人の者。前も憚と夫然も拳銃をく畏く
 士めて今王の爲相する。上人の信は。月の罪を
 彼亦が望を救。妖怪退治。よりん。受を覆より
 ゆも。其細微笑某此。上人の教を受ん。其席は
 對しての。れ。を。某が力を助んと。め。そ
 何れと我おやんと。の。の。常阿上人。席を
 耐まう。上人の。永物。語。と。其。縁故。を。彼亦が
 とう。履歴と述。と。相。知。小栗助守が父
 満重と前年一色。詮。が。護。害。せ。れ。助。守。を。念。お。ひ。
 復。の。鎌。倉。赴。き。途。に。横。山。抑。留。れ。許。嫁。世。照。天。と
 誓。其。后。横。山。が。毒。討。中。ら。ん。を。を。猜。して。主婦。は。從。脱。物。に。
 追。人。が。これ。と。戦。う。ま。照。天。が。去。向。を。失。ひ。主。從。十。人。我。の。寺。小
 栗。が。横。山。が。害。を。避。んと。死。は。ま。を。彼。を。欺。き。後。一。色。を。付。ん。

小栗巻之十二

十三

ころふ其便宜と好縁が夢の時に至るを待んとて郎黨を東國に忍びしを
 一色が動静を察ししに身三列は忍び居るに法則を基する方長が
 女兒は懸念せられ止しおく彼が許不入贅世にお不思議も妻の照天丹
 再命し遂に青臺を去り園を几つらんと函嶺におまじり時方長が女兒
 の怨鬼を祟られ不図悪瘡を患てまこと終ると始死んとせと扱き乃
 此告より車を牽きて懸河山の温泉に赴けぬと首より尾に至り中要と
 摘ぐ物結りかてゆやふ小栗女を病平愈の後船を故一色詮秀が討
 るとき使臣を好さしもうこれよ上とて恩のあじ貧道小栗がめよ好
 心を用ゆると不審ゆいぐれどこの世の因縁やいひえん小栗夫婦が
 の上おまあんとする財の必を祝音大士も老るに仏勅し多ふなりと語を
 立てお初大まきお感也。孝といひ忠と云掛りも揃り君はらう小仏のさきうり
 冥助ありのいそで本意を遂げん我又謀をばして一色を致き法余の好よ
 せとられしを期するごと志氣を遂げしより今熟に詮秀が光景をうらふ
 宿使を遣ふて君を惑し己控柄をうて驕奢を檀や。賢い奴を悪を
 漫り己お溜ありの進まず。溜るるりのぞ退くし邪悪翫高お詠を
 ちつれは士民これに悟り法士の愁訴するれと君詮秀が佞辯も感され
 法士の望を果さしもう縁が鎌倉殿を怨て逆心を腰りの少うとて我足を
 患ひ屢法をうとれ詮秀を憎む後言を挿へて退けしとあり。
 爾れども我は一定の事失るれが必とて近日の鎌倉におあさる下。その時
 家叔と穢奸は一色を助重お討し。小栗が家を再命さるといふやへけさる。
 上人をとりぬ二人の御感謝してやと各う相公斯いみじき仁心の在るお
 我門碎す彩骨しとも岩舟山の妖怪を亡し姫君は恙なく棄集ひ還す

此鴻恩を報ひし人前あり相公自ら岩舟山に赴きたまひて
 定めの人と我の命に多し折るく不意のゆゑに。と云ふまゝ。上人も傷み蕭
 むし多と辱むるお持朝を裡に想ふや。我昨日岩舟山にて妖怪を騙
 されだま云甲斐あり想ふなるや。再び彼山に行き給ふれば臆病のこと
 云まんと生涯の恥辱此に入しと云ふを交々回意々ある。二人の老のこゝろ
 処いとく勇まされ其心は任まんと。弓矢とるや。夕暮を惜まれ
 まの妖怪は編みれを恐れ再び彼山に行かば。誹謗を受んも惜
 らま前め約束せしめ。我を付けて山鬼を討たむ。且上こと幸ひあはれ
 り。二人の持朝が秘程を精しかり。命いふを惜まざらん。我が朋輩
 をも以て彼山に赴くは準備あれ。いつ次の間あち對ひ池の庄司を
 在り。加藤は岡本の子守を呼出し持朝の見念ふべし。め今夜直に
 岩舟山に赴くと。其持朝阿上人持朝を止めて曰。白きまも人跡なき
 岩舟山に夜に乗じて行くと。石を抱ひて淵に臨み。薪を肩に火氣散らす
 べし。明且に持朝より今又我亦も命を惜まらぬ。持朝は前よりは。ゆ
 女性の姿は扮打り九人の們と酒二樽と大十疋と列は五色の縮は麻繩を隠し
 これを荷ひ行下るといひ。いつの行ゆる勢におまさん袖の裡より。この囊を
 取出し。是を持朝にまて。云山上に至り。ま。ま。牙一の囊を披れ。ま。ま。
 做るや。書おし。姫人は遭ひ多して。牙一の囊を披き。ま。ま。その
 後の深を求むるせり。車に望まんと。及び。牙一の囊を披き。解して。え
 ん。人。妖怪を討た。術を記し。付たり。此三囊の謎を疑はば。て用ひ。ま。ま。
 容易に妖怪を討た。姫人を恙なく。信ひ。還り。多。疑念を死。ま。ま。
 危う。ゆ。ゆ。と。父。ゆ。ゆ。持朝。講んで。三の囊を受納め。感謝を述。

持^{もち} 九^{きゅう}雄^{ゆう}と
持^{もち}て
丹^に比^ひ
列^{りゅう}



持^{もち} 九^{きゅう}の^の 勇^{ゆう} 寺^{てら}

小栗卷之十二

十七

今ど今日も此山路を朝よりて捜索をなれと今に至るまでと申すはし
 ぬのこのふがの嘆きいと哀げぬ女は不安めて紫衣の程
 をさし歌を詠むに恍惚門の程を走入んとお初女から去りてと
 悪くまんと言は其裾をさく人驚かすありのゆゑと暫く待つて我
 言とてをゆるすと蜜の上より授けし宝鏡を知て照らすは怪し
 とほしきとけのどのの宴の人ありりとと秘室をまきび今の何ぞ包ん
 我は是結城お初め我女児の山の妖怪を奈れこれをいんととらばは
 ちつふ不圖常阿上人は遭まわじと有るは示ふより今世所か
 ちつふ山鬼をいんと我女児の此山は居るや明白なふと且山鬼の
 居るは導給爾るとたの汝もも救ひて守るは還しとてとて
 くの女心からさびて回復たぬの母の人の此山よりとせむと十日
 ちつふあも成をく山鬼が心仕りまははがゆゑも彼も縛めると
 導してとせはわらとと石門の程を誘ふ其裏度なりとて堂のごじ
 ちつふ行くは二の小屋に至りね四方を建てて裡小閣とさつと舟も
 糸を福の床に上ふ人あり近きてこれをいふはうもなれ女児とい
 候とて声を揚げんと女児これを着てとて判り早くまめんと
 りお初由あることと其室を去るは前より女もまき多の娘人
 も奴も此山を奈られずとるの久しかりの十年小及ぶもあり
 此山の鬼神女を好む人の婦女の姿目よれあれは奈何は置とも存
 此山と嘘をなせり善鬼神の心や意せざはりのあれた或十日或十三
 四日間縛り懲りて尚それをもよは任せざるの生那がその膳を
 この酒を漫してこれを飲これに法氣の膳なれば是を暖まるとは法氣

川栗卷之十二

十一

元冥して神通いよ坊主りと喜べり。相と今速に姫人を救ひまらんを。
 数百の兵を將く事りもあとも。鬼神の神通判。まふこと新まじし姫人。
 とも奴家分々們をも救ひまらんとならん。美酒と大とを運りまふ。別は結の
 裡に麻繩を繋いで是とまふららば我く相織りて鬼神を殺まん術を倣へ。今
 鬼神化行せり。然れども其眷属あらず。怪しめらば月の害るらんぞ。
 まふ只今まへすわびしとるおを準備して再び事りまふ。期は午の刻より
 後こそよけれ。一日二日の間は謀を用ひざれば姫人の命も危し。よく早
 くとまへ。お打頼を音を願望し急ぎ石門の外に生り。九人の們に打頼
 の文。洞の裡を出さるるを不審あり。日今出まひし。お相遭りて互ふ
 森ひ打頼洞の中は光景を鏡結り。まふ此付才二の囊を披きまんとて
 これを披き開くお女むらの云はるごとく露差らるれば。懐て推す耳の酒と

大と指とをりて末の下刺とあり。まふを往て石門の前は打頼し。打頼はまの
 おく女の姿は打打蜜中安んをまふ前の女再び出まれり。打頼は打頼のぬく
 敷くまわりのとらふ女をむいて云ふ。鬼神酒を好きて飲と限らず。酔と食と
 必さおのれ。力も漫り我くをば。眷属も示さん。とて五色のまふをりて。
 手足は四方に縛さし。一回身を動かさず。結すくお断く四方は散れり。まふ
 これをりて楽みと。今日も此酒をまふを飲ひ。飲ひて碎れ下。お付あ。此指の
 裡に麻繩を繋いで縛りて鬼神力がまふとも。俄に断をば。爾のまふとて
 下の難きことあり。鬼神の渾身鉄のてく。らるる利刀を用ゆるも刺はかじ
 との。相とよ。これと思ふ。まふとあるお打頼。これをまふて案。おん。か。おん。おん。
 半七才三の囊を披きこれを開く。鬼神の身軀鉄石のこ。兵は品は
 用ゆる亦は。これを討んとせ。我ま。秘符を投擲へ。其中ま。おん。おん。おん。

皮内和らぎ刀又を純まじ泥を刺がらなるんを化し爾くまどとを記より。
 杉柄がきりなく喜び九人の們ゆす三の策を示し人々を忍びりて其下を伺ふ
 女のいふ彼のの大巖の洞あり鬼神眷属亦が飲食を移る亦そその奥
 まりなるを忍びりて其下を伺ふ。社陰れり人々喜びひたをとして九人の們を
 其岩穴より忍び相圖をせし速お斬り出せりと物し杉柄の女の生り他て女
 なるの中ら難り携へ来る酒と大とを妖鬼の居る床の糸お居おき行
 へお申の下刺ともおりお比及西の方より締結るんどのてその習くと
 花身り洞の裏に入りしが鞍付して去る大漢子白綾の小袖を穿腰小
 大をかゝる佩帯より彼床の上へおと養属よりおり怪しりの所從て
 床の糸お居並ひより妖鬼大と酒ををていと喜びりおりちもて大を
 裂合ひ酒を吞とけぎりる養属亦も分らぬと解九人かかるといふ
 其より對ひ今日酒肉をゆかり來はると伺ふ女を杉柄指はして
 彼をけり女房此山近きやらの福者の妻昨夜盜賊忍ひ入り臥室
 酒肉ともれ棄れ此山は侵ひ身て臥室のををて妻と酒肉は捨ちて
 去り石門の下は嘆れ居るを着ありお痛く且酒肉のゆゆるると大王
 おきくまどくこれにおきと入りねと信し今や中へお妖鬼うち笑ひよる
 討らひはれよその女房不佞のりのごとく誘引しりか女を一般よりさら
 悲しめたまひは悦とくひは被き嘆き居れ此所石門近はけり酒宴の
 眞自ら醒く料理を失ふ至らん彼が身の子細を伺ふとおはる明日静
 中より雨ふ雨の村の酒宴の妨げもあまを彼もを安堵ぬがれ御静
 事情を知しめんとし女妖鬼既既汝ホがし道行くと尚茶杯を
 傾けて十二分の酔をさしぬ眷属もともお酔く其席をまうてその女を

其光系と密に着く時こそよけれと迫み集りて大王今日も力を中し身を
 りんとけくおとくが妖鬼呵くと笑ひ今日よく縛りて常の如くしてと真
 かれどと云はく仰さぬお臥さむらわ拵胡の携へ五色の縮み麻縄を
 うねをりて手足と縛り石の床に堅く結分拵朝に忤視されぬと洞乃
 外に出で蒙衣とて相圖をなせ九人の們一般お臥れ拵朝の跡には死
 洞の裡に走入り妖鬼これ入て縛りて身を束と縛りて断人ととれと解
 こ社のごとく大まお怒り叫ぶ声雷の如し此声とてや教百の猕猴在り
 人々をて礫を打或は木片をりて討てかき九人の們拵朝に對ひ此畜生
 を我くおまほしむ相ひ妖鬼と討りてと効め群るる猕猴お故洞におあ
 くれ大木を引拵拂もあり刀と拵て切もあり勢ひおほくを討てよ一盞茶耐
 教十正次討りて残るる猕猴お恐るる岩石樹木の弁らなくおめか
 まあく逃失り其間お持胡の石床の辺に近付て秘符を拵て妖鬼が上お
 投擲お恐れ戦くと人間の矢石お厭ふが如く暫時身を縮まりて居りしが
 忽ち大喝一声と身を動くととえりしが麻繩を交へる縮断らお切れて拵
 散れお妖鬼お牙を拵て逃走しんとせぬ処に豫て教への宝鏡お懐より
 取出しは拵は照りてお不思議や妖鬼戦ひて縮縮は走りぬと此光系
 を着るよりのも鏡を假り刀を拵き逃まはと斬てかきお山鬼おこれと偷眼側
 あり鉄杖といと拵命を打り對ひ合と戦ふる恰お飛鳥の如くお
 待遇のてえくお処へ九人の們猕猴を遣退今此お入りし拵此戦ひとえん
 よりのも四方よりおつとりの圍我討りんと競ひかきおさしもお猛き妖怪も心
 ともお勞れ果さめく処を庄司助長太刀おかきと投棄てて手と組り押
 めく傍華討とる人くとと心お勵しんとするやとおゆるく大地お

封
 鏡と持
 持
 其の
 九人の
 斬
 まり



常阿の
 法力
 持朝と



小栗巻六十二

九

捻仗ねぢぢの其その付庄つきぢやう同聲どうせいを揚あげやよ持朝もちあさ公こうよ妖鬼やうきを既まふけ捕とらはは籠かごもや奉ほう
 終しまふ此こゝ下くだりてや殊こともあつとらひお任まかせんとありさるる持朝もちあさのいふも
 生捕なまとらりのるも其功そのこうを賞あづかりさるる此妖鬼こゝのやうき退治たいぢのころ鎌倉かまくらの命いのち
 小も何なにに私わたくしのたはせはて我われにありさるる山やまを將まさてわらへり我
 自らみづかり殊ことせんとい秘符ひふをりて妖鬼やうきが返かへり頂いただきじ首打くびうち落おせの怪あやしむべしその首
 宇宙うちうふ奔はり怒おこる眼まなこを血ちを灌そそぎにり吐息そそげ火ひのてくと恐却おそくつれ先
 景さまなり世よ付持朝もちあさまの宝鏡たからかみをさし押おせの槿きん花はなの旭あすひはあててく猛悪もうあくなり
 妖鬼やうきの首くび忽たちち地上ちのうへふとこと落おちて眼まなこ困こ死し失せる鬼神きしん亡なひて目出めでしと
 人ひとくたむ勇ゆうは近付ちかづきて熱あつくさるる幾いく年ねん経へるとも知らぬ大おほきやう
 なる白しろ猿さるこれ乃阿なつあ上人じゆんの説知せつちはもふ攫くといふ妖獸やうじゆを足あしさめりこ上うへ
 の博識はくしきと感かんじたり持朝もちあさの命いのちを維まもつて持朝もちあさのうらまに再またこころにおのり上人じゆんの
 骨ほね二ふたつ九こゝろ人の們らが勇力ゆうりきよれりと感謝かんしゃしてよほとびまりかゝり持朝もちあさと
 白糸しろいと姫ひめと尋たずねて小幸こさいに恙やうなくありしうの父子ふちこ互たがに飲のびの對面たいめんをたじ
 前まへ毎まい案内あんないする女おんならうとも海うみ出いてまじりて勞あつげ謝あやす其その身みはれう人を
 問とふみる良家りやうかの婦あづま女ななり持朝もちあさまを憐あはれと俱い一行いっけいひくその家いへくは
 おろり還かへらるるまじとありしうのみ好喜こうきしく恩おんを謝あやす此こゝ付つきに岡おか加か郎らう
 進すすみおとてさるるかた妖鬼やうき天あまてもよく崇あがりさるるのこ早く燒やき
 其その邪よこしまを拂はらひり人と誅つじられ実まこと爾にころりしれとて妖鬼やうきの屍しかばねと眷属けんじゆく
 亦またが屍しかばねとを一所いっしょに棄すて鬼おにの時ときは飲食おんじき調度てうどを困こりお積つかさして
 こまに火ひがけ洞ほらの中なかに燒やきはくし白糸しろいと姫ひめをたじりて女おんなをたじりて俱いれ
 九こゝろ人の人ひとくと俱いれ岩舟山いわふねやまを下くだり常阿じやうあ上人じゆんの旅宿りよじゆくまじり妖鬼やうき容よう易いに
 失うせし先まへ光景あかりざとは洋やう小説せつ活かつの恩おんを謝あやすれば常阿じやうあ上人じゆんもこまに喜よろこぶこと

骨ほね二ふたつ九こゝろ人の們らが勇力ゆうりきよれりと感謝かんしゃしてよほとびまりかゝり持朝もちあさと
 白糸しろいと姫ひめと尋たずねて小幸こさいに恙やうなくありしうの父子ふちこ互たがに飲のびの對面たいめんをたじ
 前まへ毎まい案内あんないする女おんならうとも海うみ出いてまじりて勞あつげ謝あやす其その身みはれう人を
 問とふみる良家りやうかの婦あづま女ななり持朝もちあさまを憐あはれと俱い一行いっけいひくその家いへくは
 おろり還かへらるるまじとありしうのみ好喜こうきしく恩おんを謝あやす此こゝ付つきに岡おか加か郎らう
 進すすみおとてさるるかた妖鬼やうき天あまてもよく崇あがりさるるのこ早く燒やき
 其その邪よこしまを拂はらひり人と誅つじられ実まこと爾にころりしれとて妖鬼やうきの屍しかばねと眷属けんじゆく
 亦またが屍しかばねとを一所いっしょに棄すて鬼おにの時ときは飲食おんじき調度てうどを困こりお積つかさして
 こまに火ひがけ洞ほらの中なかに燒やきはくし白糸しろいと姫ひめをたじりて女おんなをたじりて俱いれ
 九こゝろ人の人ひとくと俱いれ岩舟山いわふねやまを下くだり常阿じやうあ上人じゆんの旅宿りよじゆくまじり妖鬼やうき容よう易いに
 失うせし先まへ光景あかりざとは洋やう小説せつ活かつの恩おんを謝あやすれば常阿じやうあ上人じゆんもこまに喜よろこぶこと

けきり形。斯く持朝を九人の人々が労ひ謝し、今主人小栗女重宿志と
 遂えんと欲し力をはして今日之恩を報ぐべし。此奉と申す小栗夫婦は告げし
 云はく城中へ入らんとす。大刀馬と申すはこれを下程とされぬ。九人の御恩を
 謝し相云の好意のほどを申す。助をたまはぬ。告知し喜ばしめんとす。お
 旅奈と申すは常阿上人も我の諸國を往行の身なり。此地方へ来り居る人の
 宗祖の意思も善なるは是より奥の方へ赴くと旅の宿りとする。しがまは
 持朝と申すは止んとされど止らざる。旅の費も亮多とて令浪次申すは二
 不住の此方より一鉢の外に申す。何と申すとこれ又上人受給し。持朝尚
 さあぐふ止むれと上人今もあぐふ回意。あぐふ杖を拂ひ東へさし
 立出まは九人の人も名錢を惜めど上人の畏くして其殿影を伏拜し。や
 慈野へ赴くと持朝は眼を乞西とさし。旅費をば持朝の上人と九人の
 人の後影のよみぬまてえ送り。姫をばめ女をらと復して城中ふかきまを
 北の方へあもはく。上下男女の家臣も白糸姫の恙なく畏る。故に
 奉死されり。の難し異なり。戻さる。て後し。まのま。く。作し
 事ありはる女を。その家くお送り。還し。け。目。国民。信。人。受。持朝
 が仁常阿上人の徳九雄の勇を賞し。ま。ら。ぬ。り。の。か。う。り。け。て。

小栗外傳卷之十二 畢 北郷芳

